角川文庫
—3530—

鮮やかな男

城山三郎

角川書店

昭和五十年八月十五日　初版発行
昭和五十二年三月二十日　七版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

鮮やかな男

著作者　城山三郎
発行者　角川春樹
印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京③一九五二〇八
株式会社　角川書店
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　旭印刷・千曲堂製本
0193-131007-0946(0)

鮮やかな男

他五篇

城山三郎

角川文庫

3530

目次

多忙といわれた男　五
ファンタスチックな男　三九
鮮やかな男　九三
ロールスロイスの男　一四三
非常口の男　一八五
百二十点の男　二三五
解説　尾崎秀樹　二七二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

多忙といわれた男

1

エンジン・トラブルのため、飛行機は十二時間余おくれて、夜の九時、羽田に着いた。

平河は焦立った。飛行機の中を駆け回りたい気持であった。せっかく立てておいた予定は、すべてくずれた。

眠るのは飛行機の中。朝日とともに羽田に着くや否や、その足で会社へ車をとばす。車の中では、開発部長と総務部長を同乗させて会議。一〇・〇〇—役員会、一一・三〇—三友銀行支店長挨拶、一二・〇〇—アオイ商事専務と会食、一・〇〇—製造部長と打ち合わせ、一・二〇……と、細かくスケジュールを組ませていた。五分、十分のロスでさえ苦痛という感じだった。それが、十二時間もおくれるとは。

延着とわかって、平河はホノルル空港から日本へ打電した。

「ヨテイスベテトリケシ　ムカエイラヌ」

誰も来るなと、むしゃくしゃする気分だった。

夜おそく羽田へ着いたところで、一切のビジネス活動が停止している。そこで会社関係の人間に会うだけ無駄だと思った。

それでも通関を終えて出てくると、

「社長、お帰りなさい。お疲れでしょう」
きまりきった声をかけ、四人の男が頭を下げた。常務二人、それに総務部長と社長秘書である。
その一行から少し離れて、妻の昭子が笑顔で立っていた。
平河はちらっと昭子を見てから、眼を男たちに戻した。
「なあんだ、来てたのか。来るなと言っておいたのに。無駄だな、時間の無駄だよ、きみたち。もっと時間を有効に使わなくちゃ」
いつものくせが出て、たたみかける。
「それでも……」
と、痩せた岡常務が口ごもる。二人の常務は、平河よりも十近く年長である。
「まあいい」
平河は、ぷいと眼をそらして歩き出した。
〈だから、きみたちは無能なんだ。いや、無能だから、こんな風に出迎える以外に術はないのか〉
そんな風に続けたい衝動をこらえた。常務たちは、とりあえず空港の特別待合室の一つを借りておいたという。平河は、できる範囲でのビジネスの打ち合わせをすることにした。
大股に待合室に歩いて行く。昭子がすり寄ってきて、小声でささやいた。
「わたしも一つ部屋をとっておいたわ」

「うん？」
「空港のホテル。だって、鎌倉までは遠いんですもの」
常務たちに気づかれぬように、一瞬だが、色っぽい眼をした。
「わたし、ホテルの方で待ってますわ。お仕事の邪魔しては悪いから」
平河の答えを待たず身をひるがえし、常務たちに短くねぎらいの声をかけて去って行った。
平河は、思わず大きな息をし、ついで苦笑した。
昭子のやつ、考えている。日常的な生活に入ると、平河は、すぐ仕事だけに心も体も奪われてしまう。そうはさせまい、せめて一晩でも、じっくり愛を交そうと、作戦を立てた。女ざかりが編み出した知恵である。
しばらくぶりの昭子の軀を思うと、平河もまた若者のように軀が熱くなってくる気がした。
待合室で四人を前に向き合う。
「米国での収穫はいかがでした。例の……」
岡常務が平河の顔色をうかがいながら切り出すのを、平河は遮って言った。
「決めたよ」
「はあ？」
「合弁で行くことに決めて、サインしてきた」
四人は、顔を見合わせた。その顔に不安と当惑がみなぎる。

平河の平安家具製造株式会社では、自由化前の乱戦気味の家具業界で一大飛躍を遂げるため、代表的なアメリカのベッド・メーカーであるオレゴン社から資本と技術を導入する計画を立てていた。その調査と予備折衝のため、平河は渡米したのだが、このままでも十分やっていけるのに、気心の知れぬ外資と組む必要はないという反対論が、社の内外に強かった。

それを知っていて、いや、知っているからこそ、平河は一気に仮契約まですませてきてしまったのだ。

自分が設立し、自分だけが獅子奮迅の働きをしてここまで育ててきた会社。煮て喰おうと焼いて喰おうと文句を言うな、という気持が平河の肚の底には在った。

「さあ、明日からは忙しくなるぞ」

平河は常務たちの追及を封じるようにして言った。

外資導入について、大蔵省、銀行筋、取引先、同業者と、各方面への了解工作をはじめねばならず、それも結局、平河が先頭に立ってやる他はない。

〈あなたは自分から忙しがってるのね。自分で忙しくして、よろこんでるのよ〉

別れた先妻の琴江の声が、ふっと耳に浮かんでくる。家に居つかぬ平河に、琴江は二言目にはそう言って、うらみがましい目を向けたものだ——。

その場では、翌日の日程などについて打ち合わせた程度で、平河は早々に常務たちと別れた。

その短い時間の間でさえ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈こんな連中とまともに話し合ったって、時間の無駄になるだけだ〉

と、思い続けていた。

それよりも、二十日間のブランク、それにまた明日からはじまるブランクに備え、今夜一夜は思いきり昭子を愛撫(あいぶ)しておこう。その方が、多忙な身には、はるかに効率的な時間の配分なのだ——。

2

空港ホテルの一室では、すでに昭子が緋(ひ)の色のすきとおったネグリジェに着替えていた。

昭子は平河より十五も若いのだが、平河の多忙さと性急な気性をのみこみ、平河のペースに合わせるコツを心得ている。

平河は満足だった。腕の中に炎のような体を抱えながら、室内に眼をやる。

その眼に、さらに満足した光が浮かんだ。

ベッド脇のソファには、ステテコ、肌着、ワイシャツ、ネクタイ、靴下が、バスでも待つ列のように、一列に並んでいた。平河の流儀である。たとえ暗がりでも、また、半分眠りながらでも、身支度(みじたく)できるようにしておくのだ。

枕もとのテーブルには、小型テープレコーダーとマイクも用意してあった。

これも、平河の流儀である。夜中に思いついたアイディアや指示を、すぐ吹きこめるようにし

ておくのだ。
腕の中から昭子が平河を見上げ、その眼の先を追った。
「あれでいい？」
「うん」
「……でも、今夜は要らないんでしょ」
「いや、要る。いつだって要る」
「そう」昭子はちょっとがっかりしたように言ってから、なまめかしい眼になり「要らなければ、わたし、あのときの声を録音しておこうと思って」
「ばかな」
「でも、いいでしょ。わたしたちの声ですもの。若いときにはこうだったって、いつか……」
平河はとり合わなかった。
とり合わぬことで、昭子の言い分を認めてやったようなものであった。
まだ三十二歳の昭子。その若い体に、それが慰めにもなるものならと思った。
昭子が、背のびするようにして、平河の唇を吸った。そのときふいに、平河の腕でジジという音が鳴った。
昭子の緋の体がとびのく。
「なに？」

心配そうな顔。平河は笑って、昭子を抱きすくめた。
「常務たちを追っ払うためさ。二十分で打ち切ろうと思って掛けておいた」
「うれしい。今夜はわたしだけなのね。たっぷりと愛して」
昭子は鼻を鳴らすようにして、すがった。
素裸になり、平河は荒々しく昭子と交わった。交わりながら、ツイン・ベッドのスプリングが少しやわらか過ぎると思った。オレゴン・ベッドと提携すれば、もっと腰の強いスプリングができるはずだ——。
一方、昭子は平河に組み敷かれるとき、すばやくレコーダーのスイッチを入れた。
ひとしきり声を立てた後、汗ばんだ額をぬぐった手でスイッチを切った。
素裸のまま、二人並んでバス・ルームに入る。
筋肉質で骨格のたくましい平河と、白く肉づきのよい昭子の体が、大きな鏡に映る。見とれている昭子に、
「おい、風呂場に本が置いてないぞ」
平河は、家では浴室にもトイレにも小さな本棚をつけ、何冊かの本や雑誌を置き、わずかの間でも読書する習慣であった。
「だって、何をお読みになるかわからないんですもの」
形のよい眉をくもらせる昭子に、

「おまえの体を読もう」

平河は背をかがめて、昭子のあまい葡萄色の乳首を吸った。

「行ったあとは、くすぐったいのよ」

と言いながらも、昭子は息をはずませる。

平河は、奇妙な風にからみ合った男女の姿を横目で鏡に見ながら、これではまるで夫婦同士というより愛人との戯れだと思った。

だからといって、昭子が正式の妻であることに不満はない。妻が愛人であり、愛人が妻である——多忙な夫には、それがふさわしい。

本妻の他に、妾なり愛人なりを置き、あちらにもこちらにも顔を立てるということは、忙しい平河にはできぬ相談であった。

先妻の琴江には、ほとんど無一物での結婚以来苦労をかけてきたが、勝気で、それでいてのろまな性格が気に入らなかった。このため、昭子という若く可愛い女にめぐり会うと、平河は容赦なく琴江を離婚し、昭子を籍に入れた。

多忙な身には限られた人生の時間。気にくわぬ琴江との時間を持つことはないと思った。

琴江は三千万円の慰藉料を要求したが、平河はあっさりのんだ。金でカタがつくものなら、人生の時間に代えられぬと思った。公私ふくめてそうした万一の場合に備え、平河は信用組合に常時ひそかに八千万円という匿名預金を置いてある。

情愛がないとか不人情とかささやかれたが、義理も欠く、人情も欠く、恥もかくという「三かく主義」でなくては、とても忙しい世の中を渡りきれぬ。あちらを立て、こちらも立てているのは、どれも落伍者ばかりなのだと、問題にしなかった——。

湯から上がると、平河はもう一度、昭子を抱き、その後、昏々と眠った。

夜明け近く眼がさめる。

いつの間にか、昭子は自分のベッドに戻って眠っていた。

結婚以来、平河は同じふとんやベッドで昭子を眠らせたことがない。交わりが終わると、すぐ昭子のふとんへ戻らせた。睡眠時間を邪魔されるのが惜しかった。

その躾通り、二十日ぶりというのに、昭子は自分のベッドへ引き退っていたのだ。平河は、珍しく昭子がいじらしくなった。

おい、と呼び寄せ、裸にした。

やはりスプリングがやわらか過ぎる。そう思いながら、また交わった。そして、終わってしまうと、昭子のベッドに戻し、また眠った。

眼ざめると、朝日がカーテンの隙間からさしていた。

昭子は化粧バス・ルームで化粧している。一夜ではりのある顔になっていた。

だが、これもまた一夜限りになるかも知れぬ。当分は鎌倉の家まで戻れず、都内のホテルで寝起きを強いられる忙しさとなろう。

そう思うと、また不憫になった。愛の営みを集中し徹底してかたづけておこう。それが、最も効率的な時間配分なのだ。

平河は自分でふしぎなほど軀がよみがえっているのを感じた。昭子の肩を抱いてベッドに誘った。

「また？」

昭子は、はずんだ声をあげた。

終わった後、昭子はしばらく動かなかった。

「すごかったわ。わたし、腰が抜けてしまったみたい」

その後、婉然と、

「またおねがいしますわ」

「だめだ。当分だめだぞ」

平河は強い声で言い、腕時計のベルを九時二十分にセットした。九時からはじまるビジネスの時間。平河はふつうの用件は二十分刻みで処理する方針であった。

3

平河はオレゴン・ベッドとの提携を強行した。資本は日本側六〇、オレゴン四〇の割合とし、まずオレゴン社の最新型のベッド量産設備を導入することになり、その新工場建設がはじまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com